



新鶴見小

江ヶ崎町2番1号 ☎583-8915

124年ぶりの日に

教務主任・児童支援専任 更科 和也

「おには一、そと！ふくは一、うち！」節分によく聞かれた声が、近年あまり聞かれなくなったように感じるのは気のせいでしょうか。家庭によっては、近隣の迷惑を考えて、心の中だけでそっと唱えるようにしているのかもしれませんが。幼い頃、歳の数だけ食べるんだよと教えられた福豆も、気が付けば食べきれぬ数ではなくなってしまいました。節分が来るたびに、時の流れを実感します。

少し前になりますが「鬼」をテーマとしたアニメが大ブームとなり、社会現象まで引き起こしました。本校の子どもたちからも、文房具や洋服、マスクの柄など、生活のあらゆる中にその影響を見ることができました。低学年の子たちの会話の中にも、登場人物の難しい名前をよく聞くことがあり、年齢を問わず人気があることを感じました。自分自身も以前から漫画の内容に興味をもっていたため、映画館に足を運んだり、単行本を全巻そろえたりと、ブームにしっかりと便乗してしまいました。このアニメが多くの人々を引きつけた魅力は、主人公の純真な心や家族愛、主人公を支える多彩な仲間たちもさることながら、敵である「鬼」の存在が欠かせません。もとは人間だった人々が鬼になってしまう設定なのですが、なぜ鬼になってしまったのかという背景がしっかりと描かれており、敵であるにもかかわらず同情してしまうほどでした。鬼の行動にも意味をもたせることで、物語の奥行きが生まれたように思います。

日本では、昔から鬼がよく話の中に登場しました。『ももたろう』、『いっすんぼうし』、『こぶとりじいさん』…。多くの場合、鬼は悪役として登場し、主人公に退治されます。日本の鬼は、人間の心に潜むうらみや憎しみであり、もとは形がありませんでした。仏教と結びつき、現在のイメージがついたと言われていいます。目に見えない感情を具体的な形にすることで、どうにか対処しようとした先人の知恵がうかがわれます。

鬼が付く言葉に「疑心暗鬼」という熟語があります。疑いの気持ちをもっていると、暗がりの中にいるはずのない鬼が見えるという意味で、疑う心があると何でも無いことに対して恐ろしく感じたり、怪しく感じたりするということを表しています。新型コロナウイルスがいまだに猛威をふるい緊急事態宣言が発出されている現在、先行きの見えない不安に誰もがさらされています。咳き込む人がいれば感染を疑い、近い人が感染すればその周りの人も陽性だと疑う。そんな疑いの心が、さらに人災を生み出すことにもなりかねません。

疑う心を吹き飛ばすには、正しい知識と堅実な感染予防対策が必要です。本校でも、毎日の検温や消毒作業に加え、時間差登校や休み時間の遊び場所の割り振り、密にならない授業内容の工夫など感染予防に努めています。代表委員会で子どもたちが話し合い、「ソーシャル ディスタンス ウィーク」を設定したり、生活の中で気を付けることを替え歌にして放送で流したり、整列して待機できるよう流し場の足下にクイズを貼り付けたりと、子どもたち自身も進んで感染予防に取り組んでいます。疑心をもたず、必要以上に恐れることなく日々健やかに生活している子どもたちを見ると、とても頼もしく思います。

今年は、2月3日が立春の日にあたるため、節分は前日の2月2日となります。2月2日が節分となるのは、実に124年ぶりだそうです。今年の恵方は、南南東のやや南。節分の日、豆まきをしながら新型コロナウイルス感染症という「鬼」を追い払い、恵方に向けて一刻も早いコロナ禍の収束を願いたいと思います。地域の皆様、保護者の皆様、今月も感染症対策を含め、ご理解とご協力のほどよろしくお願い致します。